植柳の風

植柳小学校　校長室便り
平成３０年１月１５日　ＮＯ．７９

進むグローバル化

今回の学習指導要領改訂の目玉の一つが、「英語教育」であることは周知のとおりである。これまでは、小学５．６年生で「外国語活動」として「英語の音に慣れ親しむこと」「コミュニケーションに対する関心・意欲・態度を育てること」などを目標として、歌やゲームをしながら、Ａ．Ｌ．Ｔの先生たちと楽しく英会話をする活動を主に行ってきた。それが、今度の改訂により、こういった活動を小学３年生・４年生に早めるとともに、高学年では「外国語科」として導入し、「聞く」「話す」活動に加えて、「読む」「書く」という学習が入ってくる。教科書、評価等も他の教科と同様にしていくことになるわけだが、アルファベットの読み書きから始まり、身近な単語や国の名前、簡単な英文を読んで書くことになる。

私たちの小学校時代は、外国人自体がまだまだ珍しい時代で、日頃の生活の中で、外国人に会うことはめったにないことだった。今でも覚えているのは、小学６年生の時、長崎グラバー園を修学旅行で訪れた時、初めて外国人に出会い、興奮し、友だち数人とサインをお願いしにいったことを覚えている。それだけ、外国の人や、外国の文化に触れる機会が少なかったのだ。しかし、今やグローバル化が進み、テレビの世界ではもちろん、熊本、八代でも欧米、アジア諸国など外国人の方に触れる機会が増えており、英語力の向上は、これからの現代社会に必要な資質・能力の必須アイテムとなっている。

また、今回の改訂理由の一つに、２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックの開催もあり、さらに、今学校で学んでいる児童生徒が卒業後に社会で活躍する３０年後の２０５０年代は、より一層多文化・多言語・他民族の人たちが、様々な社会的・職業的な場面で交流することが予想され、外国語を学ぶことは、外国の人たちと積極的にコミュニケーションを取る態度を育成することにつながることが期待されている。

１３日（土）、午後から日本教育会熊本県支部が主催する講演会（熊本市民会館）に出席し、長岡市国際交流センター長　羽賀友信氏のお話を伺った。演題は「グローバル時代を生きる子どもたち～英語ができるだけではグローバル人材ではない～」。羽賀氏は、２０代から海外で国際協力に携わってきた経験を踏まえ、次のような内容の話を語られた。

◇明治以来、欧米に追い付け追い越せできた日本は、欧米を中心とする国際化路線をこれまで国や企業レベルでやってきたが、インターネットで瞬時に世界とつながる現代は、グローバル化が個人のレベルでもできるようになってきている。
◇英語は世界の共通語と言われているが、実は世界の国々の中で、英語を母国語としているのは７％に過ぎない。他の言語にも触れる機会、学ぶ機会を増やしていくべきである。
◇英語を教えるだけでなく、日本には誇るべくたくさんの文化があることに気づかせ、発信できるような表現力を身につけるべきである。
◇南スーダンでは、自分がアラビア語をしゃべれるということで喜んでくれた。現地の言葉を使うということは、「私は敵ではない。あなたを理解しようと思っています。」というメッセージを伝えてくれる。
◇日本で働く外国人の３９％が何らかの差別を受けたと感じている。
◇日本では「和して同ぜず」という文化があるが、世界では「わかりません」というのはタブーで、自分の意見を激しく論じることが多い。人格を否定せず、安心して意見を交わし合う場を増やしてほしい。